

保育園の防災力向上に関する研究 —保育園での防災ワークショップ—

東京大学大学院 学生会員 ○阿部 真理子
東京大学生産技術研究所 正会員 目黒 公郎

1. はじめに

地震、火事、不審者侵入等の予測のつかない危険が発生した時、幼い子供達は自分だけで対処するには身体的にも精神的にも未熟であり、大人の手を必要とする。今日の社会で幼い子供達が集っている代表的な場所は保育園や幼稚園であり、ことに保育園は生まれて数ヶ月の幼児から預かっている。一般の家庭に比べて、これらの集団では大人一人に対する子供の数が多いため、災害発生時に大人にかかる負担はより重い。この問題に対応するためには、従来の自治体主導によるトップダウン型対応だけでなく、防災情報の共有や人材育成といった事前の防災対策を重視した活動を各園が自主的に行う必要がある。

このような背景を踏まえ、本研究では、保育園で「防災状況のイメージ」から「現状認識・課題把握」⇒「対策の考案・実施」に至る自主的・持続的な防災対策サイクルを確立することにより、保育園の防災力を上げることを目的とした。現段階では、まず「防災状況のイメージ」と「現状認識・課題把握」を行うため、「目黒巻」という災害状況をイメージするためのツールを用いた防災 WS(ワークショップ)「目黒巻 WS」を提案した。また過去の災害事例等のデータを収集してデータベース化し、保育園等での防災対策に活用することも目指している。(図1)

研究の効用としては、保育園で育まれた防災意識が園児の保護者の職場や自治会等を通じ、地域に広がっていくことも望める。「防災」を自分自身の問題として中々捉えられない人でも、子供達のことを持ち出すと「防災対策は見過ごせない課題である」と感じてくれる。また保育園をターゲットとすることにより、将来の防災を担う人材としての子供達の防災意識の育成も目指している。

2. 目黒巻

災害に備え、かつ起こった時に機敏に対処するためには、災害のイメージトレーニングが不可欠であり、目黒巻はそのためのツールである。目黒巻の記入者は、まず災害の種類や発災時の条件(季節、天候、時刻等)を決める。これらは様々に変えてくりかえし行うことが有効である。次に災害時にどこで何をしていたのかを記入し、災害発生後の状況をイメージしながら自分を主人公とした物語を巻物状の記入用紙に書き綴っていく。記入欄はほぼ白紙上なので、自分の性格に合わせて自由に記述できる。(図2)

目黒巻の前身は、災害状況イメージネーションツール「目黒メソッド」である。目黒メソッドは目黒(2001)¹⁾により提唱され、いくつかの自治体の防災担当者や大学生の間で使用されてきた。この効果は非常に高いが、設定の複雑さや記入内容の多さのため、記入者の負担が大きかった。そこで、今回目黒メソッドを保育園という場に適用するため、「短時間で楽しくわかりやすく」行えるよう簡略化したのが目黒巻である。

3. 目黒巻WSの流れ

目黒巻 WS では、まず初めにイントロダクションで WS の流れについての説明等を行ない、次に各自で目黒巻への記入を行う。そして目黒巻を並べてお互いに見せ合うことで話す糸口を掴み、書き進めていく中で思い浮かんだ疑問点や問題点を出し合っ、専門家の回答や過去の災害事例を参照しながら解決していく。また記入内容等の分析も行ない、最後に話し合いの結果のまとめとして、設定条件下での行動マニュアル等を作る。

以上が目黒巻 WS の基本スタイルであるが、WSを行う度に柔軟に形式を工夫し、持ち時間や参加者の意識の程度に応じて、状況に適した形で行うことが重要である。(図3)

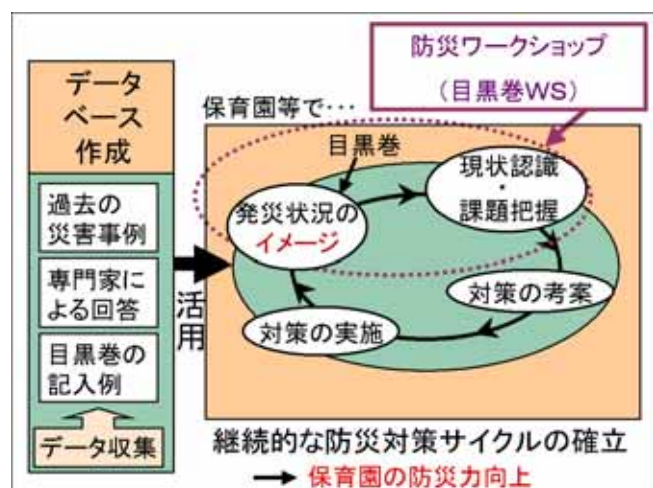


図1 保育園の防災力向上のための対策イメージ

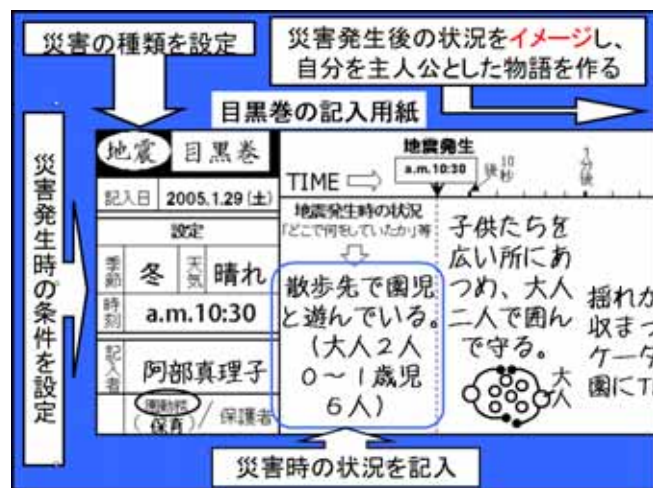


図2 目黒巻用紙と記入の流れ

キーワード：地震防災、ワークショップ、イメージトレーニング、保育園、データベース

〒153-8505 東京都目黒区駒場4-6-1 東京大学生産技術研究所B棟 目黒研究室 Tel:03-5452-6098, FAX:03-5452-6438

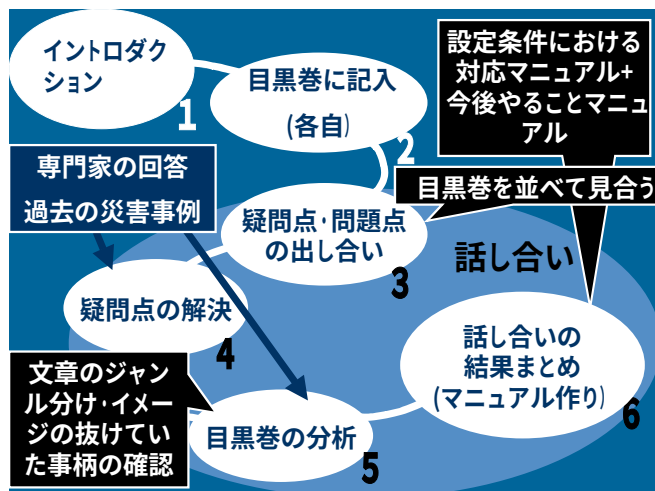


図3 目黒巻WSの基本スタイル

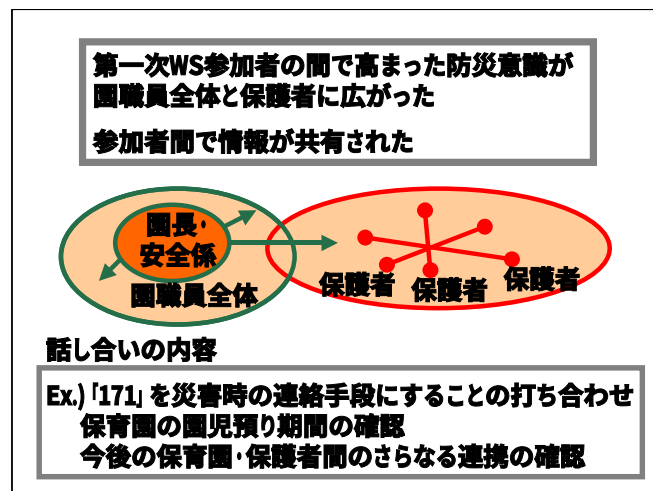


図5 第二次WSの成果

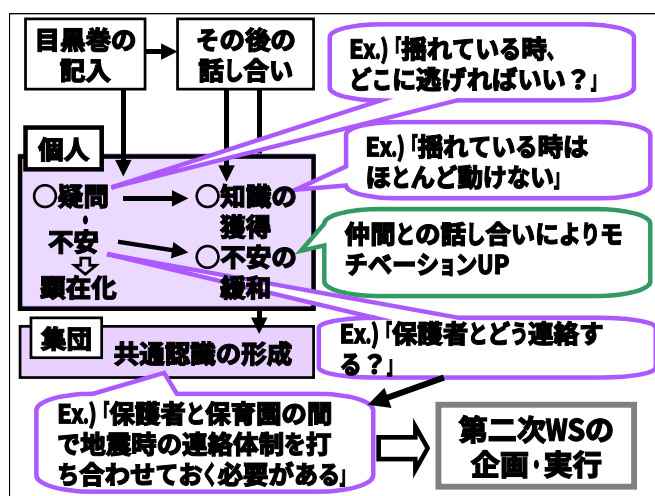


図4 第一次WSの成果

4. モデル園での実践結果

本研究では世田谷区のモデル保育園を対象に、二度にわたり大地震を想定した目黒巻WSを行った。WSを行う前に、まずモデル保育園で数週間保育士として働き、現場の状況を把握した。並行して、過去の災害事例（阪神・淡路大震災と新潟県中越地震）を調査し活用した。

第一次WSの主な参加者はモデル園の園長先生と安全係5名だった。保育士の方々が日常業務で非常に忙しいことを考慮し、一回のWSは一時間程度とし三回に分けて行った。第一次WSの成果としては、まず目黒巻の記入を通して、個人の疑問や不安が顕在化した。そしてその後の話し合いを通して防災に関する知識が得られると共に、防災対策へのモチベーションも向上した。またWS参加者全体としては、「保護者との連絡体制を事前に打ち合わせておく必要がある」等の共通認識が生まれ、第一次WSの参加者自身により第二次WSが企画・実行された。（図4）

第二次WSの参加者は園の勤務者全体と保護者で、研究室メンバーもアドバイザーとして参加した。参加者の状況や時間の都合を考慮し、図3の「疑問点の解決」までを行った。第二次WSでは、園長と安全係（第一次WS参加者）の間で高まった防災意識が園全体や保護者に広まったと同時に、情報が共有化された。（図5）参加者の間では、保育園の防災対策だけでなく、家庭での防災対策を行うモチベーションも向上していた。（図6）

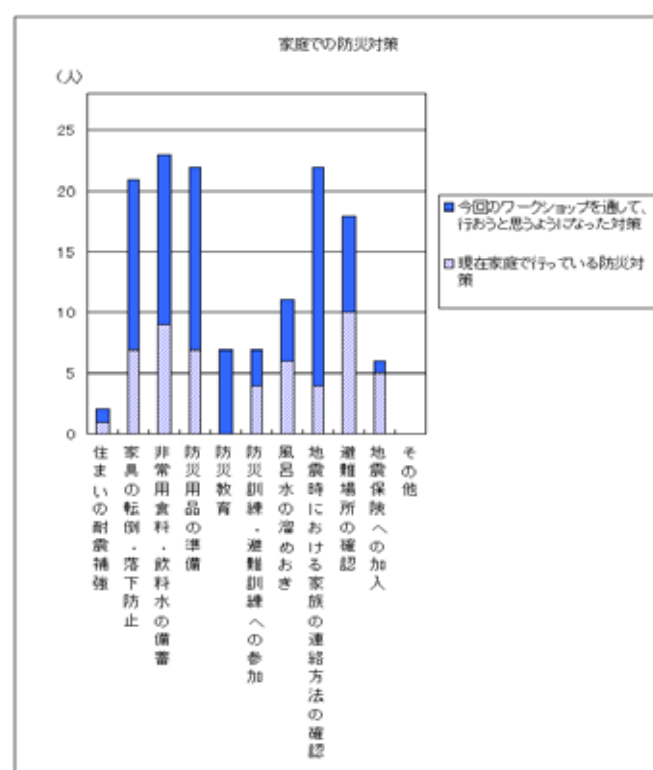


図6 第二次目黒巻WS参加者の防災意識変化

また、目黒巻の記入が二度目となる安全係の方からは、「一回目より状況がすっきり思い浮かんだ」との感想が得られ、イメージトレーニングの効果が感じられた。

以上より、2回の目黒巻WSを通してモデル園の防災対策状況が改善されたと言える。

5. おわりに

本研究では保育園主体の防災対策のきっかけ作りをする目黒巻WSの立案と、モデル園での実践・効果検証を行った。今後はモデル園で継続的な防災システム作りをさらに進めていくとともに、他の保育園や幼稚園、老人ホーム等にも目黒巻WSを広げることを目指す。

参考文献

- 1) 目黒公郎：大規模地震の動的予測モデル、地学雑誌、Vol.110、No.6、2001。